アメリカにおける女子大学研究の動向と課題

比較教育社会学コース　　加　藤　靖　子

Research on Women's Colleges in the United States
—An overview of literatures since the 1970s—

Yasuko KATO

This paper describes the recent trend of women's colleges in the United States and reviews literatures on them. Studies are classified according to the type of topic. At conclusion of this review, suggested topics for future research are discussed.

目　次

1．はじめに
2．アメリカの女子大学の動向
3．アメリカにおける女子大学に関する研究動向
　A．カレッジインパクト研究１－教育・職業達成に関する研究
　B．カレッジインパクト研究２－在学中の成長に関する研究
　C．その他の研究
4．おわりに－今後の課題

1．はじめに

日本において，女子大学は第二次大戦後の学制改革によって制度化された。しかし，女子に対して大学の門戸開放も同時に行なわれたことで，「女子の少なくとも最高学府であった女子大が，むしろ傍系の位置に回される結果」[1)] がもたらされた。そればかりではなく，発足後ほどなくして女子大学に対し，その存在意義に対する疑問が投げかけられるようになる。1950年代末には女子大学バッシングも起こり，メディアなどではさかんに取り上げられ話題にはなったものの，実際の学生募集に対しては特に影響もなく，1949年の時点で25校だった女子大学は1980年には87校と順調に発展していった。

しかしながら，1975年からの「国際婦人の10年」に男女平等や女性の社会参加を目的とした活動が世界的に展開されたことで，日本でも女性の自立と社会参加を促す風潮が巷にあふれたことや，アメリカで女子大学が次々と共学化し，日本でも共学化する女子大学が現れてきたことなどを背景に（舘 1985），1970年代末頃から再び女子大学の存在意義に対して疑問が呈されるようになった。こうした現象に呼応するかのように、1980年代初め頃から女子大学に関する研究も行なわれるようになっていく。例えば，『IDE』誌では1976年から女子教育が特集されているが，1980年代の２回は女子大学の存在意義や女子大学の将来に焦点をあてている。さらに，18歳人口の減少と共に1990年代末頃から共学化する女子大学が増えたこともあり，2000年以降女子大学に関する研究は増加傾向にある。

ところで，女子大学研究についてのレビューはこれまで何回か行なわれている。まず，神田他（1985）や真橋（1997）が 女子教育研究の一部分として女子大学研究について取り上げた他，椙山（2000）が1990年代末までの女子大学に関する研究論文をレビューしている。椙山は女子大学の課題について考察し，女子大学を存在意義のあるものと結論づけているが，程度の差こそあれ「存在意義」の模索は現在までの女子大学研究に共通したテーマとなっている。そのため，女子大学研究では，1960年代末に入学志望者減少を経験し，存在意義の実証を迫られたアメリカの先行研究を引用したり参考にしたりするものも少なくない。しかし，管見の限りアメリカの女子大学研究を詳細に紹介したものはない。

そこで本稿では，アメリカの女子大学の近年の動向を概観した上で，女子大学に関する研究のレビューを行ない，今後の課題について提示することを目的としたい。

2．アメリカの女子大学の動向

アメリカでは1960年代末頃から女子大学の入学志

願者が減少し，「1968年 6 月に248校あった女子大学が半年後には184校に減少」（Tompkins 1972, p.298），1970年代半ばには二桁まで落ち込んだ。この理由について坂本（1999）は，1960年代末に女性解放運動を中心とした教育への平等のアクセスを目指す運動が起こり，その結果プリンストンやイェールなどの名門大学が次々と女性に門戸を開放したことや，女子大学の主流顧客層である中・上流階層出身の白人女性の大学進学年齢人口の減少を挙げている。そして，女性解放運動の影響は連邦レベルの政策となって現れる。それが1972年改正教育法第 9 編（Title IX of Education Amendment of 1972，以下タイトル 9 と略す）である。この条文は，性別によって扱いの異なる教育プログラム（職業教育，専門教育，大学院教育，公立の学部段階教育が対象）には連邦政府の財政援助が与えられないことを定めたものであるが，伝統的公立女子大学の学部段階，私立大学，兵役・商船訓練の学校は適用除外されていた。

しかし，その適用をめぐっては紆余曲折があった。まず，1984年のグローブシティカレッジ（Grove City College, 共学私立）の裁判において，最高裁判所は，タイトル 9 は連邦政府の補助金を直接受けている私立学校に対して適用可能とした。しかし，1988年に制定された「公民権復活法」は，グローブシティカレッジの判決を覆し，直接的であろうと間接的であろうと連邦政府の補助金を受けるいかなる教育機関もタイトル 9 に縛られるとした[2)]。ここでいう「間接的に」とは，助成金（grant），貸付け(loan)，研究契約(contract)などの形で連邦政府の資金を大学が受け取ることを意味し，私立大学でもかなりが該当する。そのため，大学院段階では多くの女子大学が男子学生を受け入れている。

1990年代における女子大学の共学化移行をめぐる動きや危機への対応については，坂本（前掲書）などが詳しい。そのため，本稿では2000年以降の状況について述べる。1990年代は共学に移行する大学はさほど多くはなかったが，2000年代に入ると再び増加し，17校が共学化，5 校が廃校や別大学に統合となっている。女子大学の共学化は，時には訴訟になることもある。ランドルフ・メイコン女子大学のケースでは，共学化撤回を求めて学生と同窓生寄付者が訴訟を起こしたが，結局共学化は実行された。訴訟は翌年に判決が下り，学生の主張―入学を許可され学費を支払った時に，4 年間の女子だけの教育を約束されたというもの―に対して，そのような明確な契約は存在しないとの理由で敗訴，同窓生寄付者の主張―寄付は女子のみの大学に対する支援でなされたもの―に対しても，大学はトラストではなく非株式の公益法人であるという理由でやはり敗訴している[3)]。

女子大学が共学化する直接的な原因は財政危機にあり，ローズモントカレッジ（2009年共学化）[4)]やウィルソンカレッジ（2014年共学化）もそうした理由をあげている。ただし，「SAT を受ける女子高校生のうち女子大学（への進学）を検討するのは 2 %」[5)]という高校生の進学志向の変化によるものばかりではないようである。ジョージアンコート大学（2013年共学化）では男子学生が自宅から通学できるカトリックの大学が近隣にない[6)]ことを共学化の理由にあげており，また近年職業に直結しないリベラルアーツへの風当たりが強いことなども報告されている[7)]。

近年では，女子大学のトランスジェンダーの学生に対する入学拒否が問題になっている。この入学拒否の根拠となっていたのがタイトル 9 であったが[8)]，2014年 4 月29日に教育省の公表した新指針「タイトル 9 の性差別禁止は性別認識，あるいは男らしさあるいは女らしさといった固定観念に基づく考えに適合しないことによる差別に関する申し立てに及ぶ[9)]」（トランスジェンダーの学生はタイトル 9 下での差別から保護される）により，この問題は解決しつつある。2014年 9 月，マウントホリヨーク大学はトランスジェンダーの学生の入学を認めると発表した[10)]。アメリカの女子大学では学生層の多様化が進んでいる。

3．アメリカにおける女子大学に関する研究動向

上述の通り，アメリカでは1960年代末頃から女子大学数が減少しはじめた。90年代には「女子大学の復活」が報道されるなどしたが[11)]，全体的にみれば女子大学の長期的な凋落傾向は続いている。女子大学に関する研究も，将来的な方向を模索しその存在意義を実証しようとする傾向が強い。そのため，アメリカにおける女子大学に関するこれまでの研究は，卒業後の職業達成，あるいは在学中の学生の成長に焦点をあて，それらアウトカムに対する大学の効果を明らかにしようとするカレッジインパクト研究がほとんどであり，女子大学に関する政策[12)]研究などは管見の限り多くない。

本稿では，トムソン・ロイター社の学術文献・引用索引データベース「web of science」で women's college(s) というキーワードでトピック検索して得

られた文献76本のうち2000年代で被引用件数の多いKinzie et al.（2007）及びBelliveau（2005）に引用されている女子大学を対象とした研究のうち，日本国内で入手できるものを中心にレビューを行う。ただし，前者はカレッジインパクト研究に属する研究のため，引用されている研究もその系統に連なるものが多く，後者は女子大学というより社会的ネットワークに焦点を置いているため女子大学研究をあまり引用していない。さらに2007年以降の研究が対象から外れてしまうという欠点がある。そこで，それを補うため，さらにアメリカ教育省教育科学研究所の情報・文献検索サイト「Eric」でも同様に検索を行ない，女子大学を研究対象とした近年の研究も取り上げることとした。そうして得られた文献は35件である。

以下では，テーマごとに研究の概要と知見を整理する。

A．カレッジインパクト研究１－教育・職業達成に関する研究

卒業後の職業達成や社会的地位などに焦点をあて，女子大学の教育効果を明らかにしようとするもので，計量的手法を用いたものがほとんどである。対象とした研究のうち11件がこれに該当する。

カレッジインパクト研究は，「アメリカ合衆国で1960年代以降盛んに行なわれるようになった研究」（山内 2004, p.5）であるが，女子大学の教育効果に焦点をあてた研究が現れるのは1970年代の初めである。初期の研究でこれまで最も著名で多く引用されている研究としてM.E.ティッドボールの一連の研究Tidball（1973，1980，1985，1986）があげられる。これらの研究はいずれも共学大学に対する女子大学の教育効果の優位性を主張するものである。まず，Tidball（1973）では，*Who's Who of American Women*からランダム抽出した女性著名人の出身大学等を分析し，女子大学は共学大学より著名人が有意に多く，女子学生に対する女性教員の比率が高まると仕事で成功する卒業生も増えること，男子学生の割合が増えると女性成功者の輩出が減ることが示された。

また，学位取得者の輩出率を比較し，女子大学の卒業生は共学大学の女子卒業生に対し２倍以上研究学位を取得しやすいことを見いだしている。ただし，その専攻分野には偏りがあり，リベラルアーツを背景とする人文では違いが大きい（3.5倍）が，教育ではあまり変わらない（1.2倍）（Tidball 1980）としている。このような成功者輩出率に対する女子大学の優位性は，メディカルスクールへの入学者率でも変わらなかった（Tidball 1985）。Tidball（1986）でも，博士号を持つ女性科学者における女子大学の優位性を主張しているが，そこには女子学生の数と女子教員の数に直接的な関連があるとし，女子学生のアウトカムに対する女性教員の重要性を指摘している。

1980年代からの女子大学卒業生の地位達成に関する研究は，ティッドボールの一連の研究を軸として，批判もしくはそれらの知見を異なる対象やデータで検証しようとするものである。Oates and Williamson（1978）は，掲載基準の高い*Who's Who in America*で分析を行ない，小規模女子大学は小規模共学大学の1.9倍成功者を輩出しているが，セブンシスターズ，その他の女子大学，共学大学に分けて比較した場合，セブンシスターズは小規模大学（女子・共学）の3.4倍成功者を輩出しているが，それ以外の小規模女子大学と小規模共学大学では輩出率に差はなかったと述べている。また，異なる年代で*Who's Who in America*を検証したライスらは，1940～50年代では同様の傾向だったものの1960～70年代では支持されなかったとし，その背景に女子大学における人口動態の変化（学生の民族的，社会経済的な多様化）があると述べている（Rice and Hemmings 1988）。さらに，成功者の輩出率ではなく，卒業後のライフスタイルの変化の違いに焦点をあてた研究では，全体的な生活パターンの型の分布に対し大学のタイプでは差が無いことが明らかにされている（Giele 1987）。

1990年代に入ると，学位などの教育達成のみならず心理面での効果にも目が向けられるようになる。90年代の研究は，大学の選抜性や規模，SATスコア，学生の家庭環境などを統制した上で，教育達成に大学のジェンダー構成が影響を与えているか否かを明らかにしようとする。女子大学での在籍年数（０～６年）による効果を分析したRiordan（1994）では，１年の在籍でも職業や収入面でリターンがあるとしているが，他の研究では女子大学の教育効果の優位性には懐疑的である。Tidball（1985）で用いられたデータを再検証したCrosby et al.（1994）は選抜性の高い大学では女子大学と共学大学の間で違いはなく，ジェンダー構成は他の変数に比べ輩出率に対する影響は弱かったと述べており，Stoecker & Pascarella（1991）でも学生個人の経歴特性や大学の選抜性などを統制すると，卒業後の教育的，職業的，経済的達成に対する女子大学の最終的な効果は有意にならなかったとしている。また，人種別に分析を行なったWolf-Wendel（1998）でも，

伝統的黒人女子大学と伝統的黒人共学大学を比べると前者の方が後者より輩出率が高いが，白人学生が多数を占める女子大学よりも伝統的黒人共学大学の方が成功者の輩出率が高いというように，ジェンダー構成よりも各人種集団のための大学であるか否かの方が重要という結果になっている。

B．カレッジインパクト研究２－在学中の成長に関する研究

大学の諸環境の特性が在学中の学生に対して与える影響を明らかにしようとするもので，対象とした研究のうち11件がこれに該当し，研究方法は質的方法の１件を除き全てが計量分析を用いている。このタイプの研究の嚆矢としてAstin（1977，1993）がある。両研究とも対象を女子大学に限っているわけではないが，その教育効果を明らかにしている。後者でアスティンは自らのモデルをI-E-O（input-environment-outcome）モデルと呼び，「様々な環境下で学生の成長や変化が異なるかどうかを測定することによって様々な環境的体験の効果を評価」（Astin 1993，p.7）しようとした。その結果，女子大学在学は，学士号取得や教員・授業の全体的な質，学部生の履修科目，施設，個別支援の満足，全体的な満足とプラスの関連があった他，リーダーシップや勉学面での自己申告による成長にも効果があることを見いだした。また，女子大学に在学する最も強い効果は多様性志向，学生本位の教員，社会変化志向にあると述べている（Astin 1993）。

Smith（1990）は，1982年のデータ（及び1986年のフォローアップ）を用いて女子大学が学生に与える教育効果を測定した。その結果，満足度，認知的な変化，教育的アスピレーションや教育達成に関する尺度に対して正の関連があると述べており，1972年の高校生パネルデータを用いて分析したRiordan（1992）でも，女子大学の教育効果に対して肯定的な評価を下している。さらに，学生の専攻について分析したSolnick（1995）は，女子大学の学生が共学大学の女子学生より最終的に男性が多い専攻を選ぶ傾向があることを明らかにしている。

また，共学大学の女子学生に対する「冷ややかな雰囲気」を指摘した（Hall & Sandler 1982）に触発されたのか，女子大学の女子学生に対する「好ましい雰囲気」（Miller-Bernal 1989，p.364）に関心を持つ傾向も見られる。例えば，Miller-Bernal（1989）は，学生の行動，教員や仲間集団との関係，性別役割に対する態度の点から「好ましい雰囲気」を解明しようと試みている。質的方法を用いて女子大学の教育目標達成や学生への影響の与え方を分析したWhitt（1993）は，女性のコミュニティには時間，空間，機会，励ましが必要であることを指摘し，これは共学大学が教訓とすべきことであると述べている。さらに，Dowdall（1998）では，大量の酒を飲んで騒ぎ（binge drink）がちな男子がいないことで女子大学は女子学生にとってより健康的になっていることが明らかにされている。

しかしながら，一方で女子教員が多いことは女子学生の成長に関する特徴（知識面，ソーシャルスキル，職業準備）のいずれとも関連がなかったとする（Kim & Alvarez 1995）や，女子大学在学は学生の成功とは間接的な関係はあっても直接的な関係はないとする（Smith et al. 1995）など，女子大学の教育効果に対する懐疑や限定性も示唆されている。

2000年代に入ると，在学中の成長や教育効果の要因を分析しようとする研究は減少する。1990年代に多くの研究が積み重ねられたことで，新しい成果がでにくいことの他にさらに要因があると思われる。それはおそらく研究状況の変化によるものであろう。カレッジインパクト研究は，「大学効果における違いを評価するために，研究では文脈ごとの十分な数の学生や複数の機関サンプルが必要とされ」（Hurtado 2007）るが，女子大学は小規模大学が多い上に，共学化する大学が増えたことで，十分なサンプル数の確保が難しくなってきたのであろう。実際，2000年の時点で，「アメリカの中等後教育機関に在籍する女性のうち女子大学が教育する女性は１％以下」（Wolf-Wendel & Eason 2011，p.156）という。

そのような状況の中で，2000年代に公表された研究には，（Kim 2002）と（Kinzie et al. 2007）がある。Kim（2002）は，女子学生の知識面（知識面での自信，クリティカルシンキング，分析・問題解決能力）での育成に対する女子大学と共学大学の効果を分析した。結果，クリティカルシンキングと分析・問題解決能力に関しては女子大学・共学大学で有意な違いはなかったが，女子大学の学生は共学大学の女子学生に比べ，大学の知識面で刺激的で成長を促すような活動に参加する傾向があると述べている。また，Kinzie et al.（2007）は，大学での経験に関し共学と女子大で比較し，さらに女子大学在籍の学生を属性（有色人種，学年など）で比較した。共学大学の女子学生に比べ女子大学の学生は学習活動への参加や教員との交流で数値が高かったことや，上級学年の学生では同等かそれ以上に教育的な実践に関与していることが示された。

ただし女子大学の学生間の比較では，有色人種の学生は白人学生に比べ消極的であったという。

2014年に２校が共学化，１校が廃校，2015年にはさらに１校が共学化を表明するなど，女子大学をめぐる環境は厳しい。十分なサンプル数が得られない場合，その分析結果の信頼性にも疑問が生じることになる。従って，女子大学の教育効果の分析を目的とする量的研究は難しくなっていくだろう。

Ｃ．その他の研究

カレッジインパクト研究以外の女子大学研究としては，まず，女子大学を歴史的に捉えようとしたHorowiz（1984），McPhie（1991），Harwarth（1997），Miller-Bernal（2006）などが挙げられる。Horowiz（1984）は，セブンシスターズとその他３校の女子大学を対象に，これらの大学が建築学的にどのように発展してきたかを考察することで，関係者の信念が建築物のデザインに影響を与え，そうした信念が時を経て変化したことを見いだしている。McPhie（1991）は，1970年代に起きた別学大学の共学化の流れの中で，女子大学であり続けることを選択したスミスカレッジと共学化を選んだ男子大学のアマーストカレッジに焦点をあて，その分岐点となった両大学の共学化に対する評価について歴史的史料を用いて考察している。Harwarth（1997）は，1800年代から1990年代末までのアメリカにおける女子大学の役割や全体像について考察している。Miller-Bernal（2006）は，1960年代以降に共学化または廃校した女子大学や別学を維持した女子大学について個別に考察することで，女子大学の多様性や生き残りのための主要な方法を描きだし，女子大学の市場に対する適応の方法が一様ではないことを明らかにしている。

このような歴史的なアプローチに加え，女子大学の教育実践に焦点をあてた研究もある。例えば，自然科学や工学分野専攻者増加のための女子大学の取組みを考察したSebrechts（1992），学生募集戦略を考察したRicci（1994），学生層や教員の多様化に対する取組みについて考察したGuy-Sheftall（1999）などである。さらに，事例研究ではGueverra（2001）やKratzok（2010）がある。前者は，マサチューセッツ州の３つの女子大学が入学者減少に対してとった対応を考察した。後者は，レスリー大学の共学化決定までの経過を跡付け，女子大学が共学化によって直面するジレンマを明らかにしている。

これらの研究は，主に大学内部の動きに関心があるのに対し，ミドルやマクロレベルで女子大学を捉えようとする研究もある。Auden（2008）では，女子大学連合（Women's College Coalition）に焦点をあて，資料およびインタビュー分析により，共通する課題に対する学長達の戦略を考察した。そうした戦略として学長個人のネットワークの活動による外部資金獲得やロビー活動などが挙げられており，アメリカ社会に対する女子大学のサバイバルの全体像が描き出されている。

さらに，Studer-Ellis（1995）は二つの組織理論（制度論と環境論）を適用して，アメリカ３州における女子大学の設立を分析した。分析を通じて，1855年から1968年の間，ロールモデルとなった大学と州の行動が地域における女子大学の受容を促進し女子大学の設立比率を高めた一方，密度の上昇が設立を減少させたことを見いだし，様々な組織集団に関する制度，環境の影響力の検証を提唱している。

最後に，Renn（2012）は，各国の高等教育制度や個別大学に関する書類や記録，学長，教職員，学生に対するインタビューを用い，アクセス，大学の雰囲気，ジェンダー・エンパワーメント，リーダーシップ育成，文化的パラドックスについて９ヶ国14大学を比較した。高等教育へのアクセスが問題にならない国々では，女子大学は外部から学生を守る一方，彼女たちに力をつけさせるという矛盾した文化を維持していると指摘している。

４．おわりに－今後の課題

以上，アメリカにおける女子大学研究の動向を追ってきたが，これら先行研究の成果を踏まえ，わが国における研究群と比較しながら研究上の課題について述べておきたい。

まず，アメリカにおいては女子大学の教育効果を実証し，それを社会に知らしめようとする傾向があったためにカレッジインパクト研究が多かったのであるが，日本においてはそうした傾向はあまり見られない。管見の限り，近年では三宅（2009，2010）があるのみである。ただし，これらはサンプル数が少なく，ある程度の規模の研究は皆無である。日本の女子大学研究の詳しい動向については稿を改めたいが，全体的な印象としては，歴史研究を除き個別大学の取組みやその意義，課題などについて考察したものが大半である。日本では，複数の地域・大学を対象とする大規模なアンケート調査は難しいという事情もあるだろうが，それよりも大学側の意識の問題が大きいと思わ

れる。すなわち，1990年代末から共学化する女子大学は増えたが，女子大学は依然として全大学の１割を占め，伝統校などは志願者数が安定している[13] ため，積極的に教育効果を社会に発信しようという意識が薄いのであろう。とはいえ，最近では大学に対し質保証が求められ，それに関連して大学の社会貢献や社会への説明が求められるようになっている。このような点からみれば広範囲の女子大学を対象としたカレッジインパクト研究が必要であろう。そして，カレッジインパクト研究には，以下のような視点が必要である。すなわち，大学選択の時点で女子大学を選ぶ生徒は共学を選ぶ生徒と異なっているという視点である。これについてはMiller-Bernal（1989）が指摘してはいるものの，この点を分析に組み込んだアメリカの研究は管見の限り存在しない。

筆者は2014年４月にある女子大学でアンケート調査を行なったが，大学受験時に女子大学が第一志望だったと回答した学生は共学大学を第一志望と回答した学生に比べ，コミュニティ重視の傾向がみられた[14]。１大学１学科での調査であるため，他の事例に適用することは不可能ではあるが，大学が学生に与える影響を分析するにはインプット時の特徴を分析に加える必要があると思われる。

次に，直前に述べたこととは方向が異なるが，女子大学に関する研究は本質的な問題として「存在意義」から離れる必要がある。アメリカの研究群の成果をみるかぎり，女子大学での教育は効果があり，女子学生の教育について「他のタイプの大学のモデルとなることは可能」（Wolf-Wendel & Eason 2011，p.156）という点で確かに存在意義はあるだろう。また，男女の社会的・事実的不平等が存在する限り女子大学の存在意義はある（磯野 1994）と主張することもできる。換言すれば，存在意義などというものは角度を変えさえすればいくらでも作り出すことが可能なのである。しかしながら，アメリカの女子大学をめぐる状況を見れば明らかなように，いくら存在意義があろうとも消えるときは消えてゆくのである。この点から女子大学研究の新たな二つの方向性を見いだすことができる。一つは，アメリカで既に事例研究として行なわれているが，女子大学内部の政策形成過程をミクロレベルで分析することである。もう一つは女子大学を単なる教育機関として捉えるのではなく一つの制度として捉え直すことである。そのためには，政策や経済状況などの外部環境や社会規範などとの関係性を考察する必要があるが，紙幅の関係もあり，このような分析を可能にする方法論についての検討は今後の課題としたい。

注

1）青木生子『明日の女子教育を考える　女子大学長の手帳から』講談社, 1990, p.3

2）Landmark Title IX Cases in history http://bailiwick.lib.uiowa.edu/ge/historyRE.html　2014/9/23取得

3）Virginia Court, Rejecting Lawsuits, Says Randolph College Can Admit Men, *Chronicle of Higher Education*; June 20, 2008

4）Rosemont College to become coed Struggling with finances, the last Catholic Women's school in the area will admit undergraduate men in 2009 http://articles.philly.com/2008-06-03/news/25250105_1_coed-trustees-undergraduate-men 2014/9/23　取得

5）Going coed often only option http://triblive.com/news/education/5624513-74/women-chatham-college#axzz3E6vY7clE　2014/9/23　取得

6）Georgian Court University Going Coed http://wobm.com/georgian-court-university-going-coed/2014/9/23　取得

7）Armed With Data, a Women's College Tries a Transformation http://chronicle.com/article/A-Womens-College-Tries-a/136969/ 2014/9/23　取得

8）男性と同定されている学生を入学させることで，タイトル９の適用除外違反となるという理論的根拠であるようである（Kraschel 2012, p.466）

9）Questions and Answers on Title IX and Sexual Violence http://www2.ed.gov/about/offices/list/ocr/docs/qa-201404-title-ix.pdf

10）All-Women's Mount Holyoke College Changes Policy To Welcome Transgender Students Sept.23, 2014 http://www.huffingtonpost.com/2014/09/03/mount-holyoke-transgender-policy_n_5760952.html 2014/9/23　取得

11）例えば，Women's Colleges Find a New Popularity, *New York Times*, January 15, 1994 http://www.nytimes.com/1994/01/15/us/women-s-colleges-find-a-new-popularity.html 2014/9/23　取得

12）「個人ないし集団が特定の価値を獲得・維持し，増大させるために意図する行動の案・方針・計画」（大森 1981, p.130）を指し，その主体は政府のみに留まらず企業や大学も含まれる。

13）「『ブランド』女子大『就職難』で人気上昇」http://www.j-cast.com/2013/03/02167391.html　2014/9/22　取得

14）この調査は１女子大学1学科での悉皆調査（サンプル数は約500）であり，女子大学選択に関する項目を因子分析した上で，因子の平均値を算出して比較した結果である。

引用文献

（邦文）

磯野有秀 1994.「女子大学がめざす研究と教育－その現状と課題－」『新・女性と家族　自立と共生の指標』創言社

神田道子・亀田温子・浅見伸子・天野正子・西村由美子・山村直子・木村敬子・野口真代 1985.「『女性と教育』研究の動向」『教育社

会学研究』40, pp.87-107
真橋美智子 1997.『現代日本における女子教育研究の動向－1990年代を中心に－』大空社
三宅えり子 2009.「女子大学と共学大学における女子教育力の比較研究－試行的調査から－」『同志社女子大学学術研究年報』60, pp.19-29
三宅えり子 2010.「女子大学と共学大学における女子教育力の比較研究－試行的調査その 2 のデータ分析」『総合文化研究所紀要』27, pp.137-148
大森彌 1981.「政策」日本政治学会編『政治学の基礎概念』岩波書店
坂本辰朗 1999.『アメリカの女性大学：危機の構造』東信堂
椙山正弘 2000.「女子大学研究論」『大学論集』30, pp.93-108
舘昭 1985.「戦後女子学生論の系譜」『IDE 現代の高等教育』259, pp.15-22
山内乾史 2004.『現代大学教育論－学生・授業・実施組織－』東信堂

（英文）

Astin, Alexander W. 1977. *Four Critical Years Effects of College on Beliefs, Attitudes, and Knowledge,* Jossy-Bass
Astin, Alexander W. 1993. *What Matters in College? Four Critical Years Revisited*, Jossy-Bass
Auden, D. Thomas. 2008. “Preserving and Strengthening Together: Collective Strategies of U.S.Women’s College Presidents” *History of Education Quarterly* Vol.48 No.4 pp.565-589
Belliveau, Maura A. 2005. “Blind Ambition? The Effects of Social Networks and Institutional Sex Composition on the Job Search Outcomes of Elite Coeducational and Women’s College Graduates” *Organization Science* Vol.16 No.2 pp.134-150
Crosby, F., Allen, B., Culbertson, T., Wally, G., Morith, J., Hall, R., Nunes, B., 1994. “Taking Selectivity into Account, How Much Does Gender Composition Matter?: A Re-Analysis of M.E. Tidball’s Research” *NWSA Journal* Vol.6 No.1 pp.107-118
Dowdall, George W. 1998. “Binge Drinking Among American College Women: A Comparison of Single-Sex and Coeducational Institutions” *Psychology of Women Quarterly* 22 pp.705-715
Giele, Janet Z. 1987. “Coeducation of Women’s Education? A Comparison of Alumnae from Two Colleges: 1934-79” *Educating men and women together*, Urbana
Gueverra. J. 2001. “Women’s Colleges in Massachusetts: Responses to Enrollment Declines” *The Review of Higher Education* Vol.24 No.4 pp.351-368
Guy-Sheftall, B. 1999. “Diversity and Women’s Colleges” Harwarth, Irene B. *A Closer Look At Women’s Colleges* National Institute on Postsecondary Education, Libraries, and Lifelong Learning Office of Educational Research and Improvement U.S. Department of Education
Hall, Roberta M., Sandler, Bernice R. 1982. *The Classroom Climate: A Chilly One for Women?* Project on the Status and Education of Women, Association of American Colleges
Harwarth, I. 1997. *Women’s Colleges in the United States - History, Issues, and Challenges,* U.S. Government Printing Office
Horowitz, Helen L. 1984. *Alma Mater: Design and Experience in the Women’s Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s*, Alfred A. Knopf
Hurtado, S. 2007 “The Study of College Impact” Gumport, Patricia J. *Sociology of Higher Education: Contributions and Their Contexts* The Johns Hopkins University Press pp.94-112
Kim, M., Alvarez, R. 1995. “Women-Only Colleges: Some Unanticipated Consequences” *The Journal of Higher Education* Vol.66 No.6 pp.641-668
Kim, Mikyong M. 2002. “Cultivating Intellectual Development: Comparing Women-Only Colleges and Coeducational Colleges for Educational Effectiveness” *Research in Higher Education* Vol.43 No.4 pp.447-481
Kinzie, Jillian L., Thomas, Auden D., Palmer, Megan M., Umbach, Paul D., Kuh, George D. 2007 “Women Students at Coeducational and Women’s Colleges: How Do Their Experiences Compare?” *Journal of College Student Development* Vol.48 No.2 pp.145-165
Kraschel, K. 2012. “Trans-Cending Space in Women’s Only Spaces: Title IX Cannot Be the Basis for Exclusion” *Harvard Journal of Law and Gender* Vol.35 No.463 pp.463-485
Kratzok, S. 2010. “Tough Questions Facing Women’s Colleges” *New Directions for Higher Education* No.151 pp.49-59
McPhie, Laura E. 1991. “The Viability of Single-Sex College in Modern Society: Amherst, Smith and The Question of Coeducation” *Initiatives*: *Journal of NAWDAC* Vol.51 No.2/3 pp.23-31
Miller-Bernal, L. 1989. “College Experiences and Sex-Role Attitudes: Does a Women’s College Make a Difference?” *Youth and Society* Vol.20 No.4 pp.363-387
Miller-Bernal, L., Poulson, Susan L. 2006. *Challenged by Coeducation: Women’s Colleges Since the 1960s*, Vanderbilt University Press
Oates, Mary J., Williamson, S. 1978. “Women’s Colleges and Women Achievers” *Signs* Vol.3 No.4 pp.795-806
Renn, Kristen A. 2012. “Roles of Women’s Higher Education Institutions in International Contexts” *The International Journal of Higher Education and Educational Planning* Vol.64 No.2 pp.177-191
Rice, Joy K., Hemmings, A. 1988. “Women’s Colleges and Women Achievers: An Update” *Signs* Vol.13 No.3 pp.546-559
Ricci, Ronald J. 1994. “Recruiting Strategies for Women’s Colleges” *College and University: the journal of the American Association of Collegiate Registrars* Vol.23 No.1 pp.130-134
Riordan, C. 1992. “Single- and Mixed-Gender Colleges for Women: Educational, Attitudinal, and Occupational Outcomes” *The Review of Higher Education* Vo1.15 No.3, pp.327-346
Riordan, C. 1994. “The Value of Attending a Women’s College: Education, Occupation, and Income Benefits” *The Journal of Higher Education* Vol.65 No.4, pp.486-510
Sebrechts, Jadwiga S. 1992. “Cultivating Scientists at Women’s Colleges” *Initiatives: journal of NAWDAC* Vol.51 No.2/3 pp.45-51
Smith, D.G. 1990. “Women’s Colleges and Coed Colleges: Is There a Difference for Women?” *The Journal of Higher Education* Vol.61 No.2, pp.181-197
Smith, Daryl G., Wolf, Lisa E., Morrison, Diane E. 1995. “Path to Success: Factors Related to the Impact of Women’s Colleges” *The Journal of Higher Education* Vol.66 No.3 pp.245-266
Solnick, Sara J. 1995. “Changes in Women’s Majors from Entrance to

Graduation at Women's and Coeducational Colleges" *Industrial and Labor Relations Review* Vol.48 No.3 pp.505-514

Stoecker, J., Pascarella E.T. 1991. "Women's Colleges and Women's Career Attainments Revisited" *The Journal of Higher Education* Vol.62 No.4, pp.394-406

Studer-Ellis, Erich M. 1995. "Springboards to Mortarboards: Women's College Foundings in Massachusetts, New York, and Pennsylvania" *Social Forces* Vol.73 No.3 pp.1051-1070

Tidball, M.E. 1973. "Perspectives on Academic Women and Affirmative Action" *Education Record* 54, 2 pp.130-135

Tidball, M.E. 1980. "Women's Colleges and Women Achievers Revisited" *Signs*, Vol.5 No.3 pp.504-517

Tidball, M.E. 1985. "Baccalaureate Origins of Entrants into American Medical Schools" *The Journal of Higher Education* Vo.l.56 No.4 pp.385-402

Tidball, M.E. 1986. "Baccalaureate Origins of Recent Natural Science Doctorates" *The Journal of Higher Education* Vo.l.57 No.6 pp.606-620

Tompkins, P. 1972. "What Future for the Women's College?" *Liberal education: the bulletin of the Association of American Colleges* Vol.58 No.2 pp.298-303

Whitt, Elizabeth J. 1993. "I Can Be Anything!" Student Leadership in Three Women's Colleges" *ASHE Annual Meeting Paper*

Wolf-Wendel, Lisa E. 1998. "Models of Excellence: The Baccalaureate Origins of Successful European American Women, African American Women, and Latinas" *The Journal of Higher Education* Vol.69 No.2, pp.141-186

Wolf-Wendel, L., Eason, B., 2011. "Women's Colleges and Universities" Bank, Barbara J. *Gender and Higher Education* The Johns Hopkins University Press pp.156-163

（指導教員　橋本鉱市教授）